

駒音響く2日間 棋士のまち・加古川で将棋大会

半世紀近い歴史を持つ第43回全国盲人将棋大会（主催：日本視覚障害者団体連合、兵庫県視覚障害者福祉協会）が、11月9、10日、「棋士のまち」をうたっている兵庫県加古川市の加古川まちづくりセンターで行なわれた。10代から90代まで、全国から43人が参加し、駒音を響かせた。（本誌）

全国の相手と対局

趣味として将棋を楽しんだことがなくても、なんとなくルールは知っているという人が少なくないし、最近では一般の報道でも藤井聡太七段の活躍が報じられている。江戸時代初期には全盲の棋士・石田検校という人物がいたそうで、検校が生み出したとも伝わる「石田流」という戦法がある。昭和に入ってから、プロ入り後に失明した西本馨七段も知られている。

もちろん、視覚障害者用の将棋盤と駒がある。将棋盤は9×9マスの罫線が凸状になっている。盤面は白と黒があるが、弱視の人には反射の少ない黒が好まれる。縦横とも中央（5マス目）の罫線にはV字の切り込みがあり、盤の外周あるいは側面には、1マス目に1点、3と5マス目に2点の印が打たれるなど、場所の特定も容易だ。

駒は一般のものと変わらない五角形で、駒の大きさと駒尻こまじり（五角形の底面の厚みの部分）の凸点によって見分けることができる。いちばん大きな「王将」（もしくは「玉将」と、ひと回り小さな「金将」は無印、「歩」の駒尻の右端には点字の「あ」、

「香車」が「い」、「桂馬」が「う」、「飛車」が「る」、「銀将」が「ら」、「角行」が「り」となっている。数字と同じで、6点点字の上3分の2、①②④⑤の点を使っている。王と金以外は、敵陣（奥から3列）まで進むと「成る」（動ける向きや範囲が変化すること）ができる。成った駒は裏返すので、駒尻の点字の位置が左側に移り、容易に触察できる。王と金は成ることがないので、点字も不要という合理的な設計だ。弱視の人は、コマに大きく文字を書いた紙を貼って使うこともある。

自分で使い慣れた駒と盤を大会で使うことも認められている。熱心な人になると駒や盤にもこだわり、市販の高級な駒にシールを貼ったり、小さな鋏を打ったりする。将棋盤も、卓上型のものだけでなく、畳の上に置いて使う脚付きの厚い盤に、凸状の罫線をつけたものを特注する人もいるという。

対局の際には、指した位置と駒を、口頭で「三四歩」「八八角」などと告げる。両対局者が合意すれば、審判が読み上げることや、声を出さずに対局することもある。

視覚障害者の愛好家は全国にいるが、町の将棋道場や東京・千駄ヶ谷の日本将棋連盟に駒と盤を持ち込んで対局する人もいる。特に地方では対局相手を見つけるのが難しいことがあるものの、最近ではインターネット電話サービス「スカイプ」を利用した対局がはやっており、日本中の愛好家と対局することができる。

6年ほど活動しているSkype将棋同好会の初代会長で、今大会でもA級戦に出場した柏木保行さんによれば、「会員は北海道から九州まで70人ほど。毎日、対局が行なわれている」という。同好会の中でも自由対局だけでなく、年4回の順位戦があり、